

ガザ地区の即時停戦のための積極的外交を政府に要求する意見書の 提出を求める陳情に対する原案賛成討論

鈴木規子

私は、ガザ地区の即時停戦のための積極的外交を政府に要求する意見書の提出を
求める陳情に対し原案賛成の立場で討論いたします。

パレスチナのガザ地区の惨状は、日々、報道されていますから、これを知らない
という人はいないと思います。長さ 50 km幅 5～8 kmほどの細長い土地に約 200
万人が住む世界でも極めて人口密度が高い土地ですが、高さ 8 mになる壁でイスラ
エル軍に完全包囲されて人や物資が制限され、飢餓状態に陥っています。さらに、
2023 年 10 月以降、病院、学校といった国際人道法も無視したイスラエル軍によ
る攻撃では住民の 3 万 3,000 人以上が犠牲となり、このうち 1 万 4,000 人が子
どもといいます。

今年 1 月には国際司法裁判所もガザ地区ではジェノサイドが進行している可能
性を認識しています。

私は、本陳情の参考資料として「ガザ日記 ジェノサイドの記録」というパレス
チナ自治政府文化大臣アーティフ・サイフ氏の著書を読みました。「空爆のたびに
瓦礫や残骸、砲弾片と共に記憶が飛び散り、歴史が消されていく。救急車のサイレ
ンが鳴り響くたびに、誰かの希望が消えていく」と冒頭にありますが、ここで残骸
というのは人間の残骸を含みます。

ガザ侵攻からの 3 か月間、戦場と空爆、逃避行の中、チャットアプリやボイスメ
ール等でロンドンに届けられたサイフ氏の原稿はガーディアン紙やワシントンポ
ストなど西側の主要媒体に掲載されリアルタイムのジェノサイドの証言といわれ、
この 月に世界 11 カ国で緊急出版されたものですが、「まわりの者たちが次々と
殺されていき、生死を分けるのはまったくの偶然、明日まで生き延びる保障はない」
という極限状態で書かれている凄惨な記録です。

国連のグテーレス事務総長は 9 月 21 日の国連平和デーで「どこに目を向けても
平和が攻撃されています。すべての物を失い、時としてすべての人を失い、トラウ
マを抱え、恐怖に怯える人々がいます。この人類の不幸の連続を止めなければなり
ません。平和は人類すべての究極の目標です。解決策は私たちの手の中にあります。
平和の文化を育むことは、分断、権利の剥奪、絶望を、すべての人々のための正義、
平等、希望へと置き換えることを意味します。それは紛争の防止、あらゆる形態の
差別や憎悪に取り組むことを意味します。」と述べました。これに賛同しないで人
権擁護を語れるでしょうか。

採択は、全国 245 議会の採択の後追いではないかという意見がありました。私は後追いではなく、さらなる後押しであると思います。外交努力を続ける国にも意見書を届けるべきです。

私たちは第2次大戦の79年前の戦火を経て、今、平和に暮らしています。しかし、79年間、ずっと闘いが続いている地域があり現実があるのです。

そこに「停戦を求めるとい願ひ」を拒否できるでしょうか。頭の上でロケット弾が炸裂する心配がない地域に生きている私たちが、人として、せめてできることをしようではありませんか。

満場の議員諸君に本陳情の採択を求めて賛成の討論といたします。